

「嘘をつく」とはどのような言語行為か

久 保 進

松 山 大 学
言語文化研究 第32巻第1-2号 (抜刷)
2012年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 32 No. 1-2 September 2012

「嘘をつく」とはどのような言語行為か¹⁾

久 保 進

1. はじめに

「嘘をつくと閻魔さんに舌を抜かれるよ」などといった言葉がかつてはよく「嘘をつかないように」こどもを諭す目的で用いられた。「嘘つきは泥棒のはじまり」という成句もある。この成句は、『大辞泉』には「悪いと思わないで嘘をつく人は、泥棒をするのも平気になるということ」と定義されている。「嘘も方便」のように、時と場合に応じて「嘘をつく」という行為の必要性を訴える成句もある。『大辞泉』は、この成句が、「嘘は罪悪ではあるが、よい結果を得る手段として時には必要であるということ」を意味するとしている²⁾。また、「あいつは、平気で嘘をつく」のような言い回しも作品などで見かける。この言い回しは、「嘘をつくことを悪いこととっていない」と「嘘」のつき手を批判している台詞である³⁾。さらに、「嘘つき！」という発話は、相手を非難したり、なじったりする言語行為である。これらの事実は、日本語の言語使用者の間で、「嘘をつく」という言語行為が、つかれた側にとっては嫌な、あるいは、好ましくない行動であると解釈されていることを示唆している⁴⁾。

1) 本稿の目的は、「嘘」をつくという言語行為がその言語行為であるための必要十分条件を定めことである。従って、本稿では、「嘘」の類型あるいは、それに関連する行為の網羅的分析は行わない。

2) 日本語の罪悪は、悪事であって、神の意思に反する行為である罪 (sin) を意味しない。

3) 西村 (1994) には、「油断できない?」「ええ。平気で、嘘をつくから」という事例がある。

4) 用いられるコンテキストによっては、相手への甘えのことばであったりして、相手への非難の意味が漂白される場合がある。

ところで、「嘘」の意味は辞書ではどのように定義されているのであろうか。

「嘘」の文字は、「口」と「虚」に分解される。『大辞泉』には、「口」は、その7番目の項目に、「**口**が言語器官であるところから」⑤ 口に出して言うこと」と、そして、「虚」は、「事実でないこと。うそ。いつわり」と定義されている。言いかえれば、分析的には「嘘」は「事実でないことを口に出すこと」を意味し、この語単独で、ひとつの発語内行為を表している⁵⁾

ところが、『大辞泉』では、「嘘」は、「事実でないこと。また、人をだますために言う、事実とは違う言葉。偽(いつわり)」とあり、あくまでも、「虚」の部分についての言及に留まっている。このことは、「嘘」が「～をつく」「～を言う」といった言語行為動詞の文脈で用いられることと抵触しない。それにたいして、『類語例解辞典』では、「嘘」は、「本当ではないことを知っていて、だますためにそれを告げること」とあり、「嘘」を言語行為の観点からとらえている⁶⁾

これらの定義で注意すべきことは、『大辞泉』、『類語例解辞典』のいずれにも「だますために」という「嘘」をつく際の発話の狙い〔=発語内目的〕が特定されていることである⁷⁾

ところで、『大辞泉』に、「だます」は「うまいことを言ってだます」のように、うそを本当と思込ませる行為に重点があるが、「欺く」は「誓い合った恋人を欺く結果になった」のように、信頼に反する行動にたいして用いられる傾向がある」とある。このことは、「他者に対する悪意」は「だます」の本

5) つまり、「口」は言明の発語内効力を、そして、「虚」は命題内容を表す。

6) ただし、この観点では、「嘘をつく」や「嘘を言う」は冗長な言い回しということになる。

7) 「だます」を『大辞泉』で見ると、「うそを言って、本当でないことを本当であると思込ませる」とある。そこで、この定義を、『大辞泉』、『類語例解辞典』の「嘘」の定義に挿入すると、それぞれ、「…略…「うそを言って、本当でないことを本当であると思込ませる」ために言う、事実とは違う言葉。…略…」(下線は引用者)、「本当ではないことを知っていて、うそを言って、本当でないことを本当であると思込ませるためにそれを告げること」となる。このことは、「嘘」を「うそ」で定義していることになり〔=循環論法〕、定義として機能していない。

質的な意味ではないことを示唆している。そうすると、「だます」を用いて定義される「嘘」は、「他者に対する悪意」を伴うことにならない。従って、その行為の遂行に際して、「悪意」を伴わない以上、「嘘をつくこと」は「悪いこと」という観点を、その**内在的特性**〔＝本質的意味〕として含まないことになる。これらの事実を、語用論はどのように説明すればよいであろうか。

本稿では、「嘘をつく」という言語行為には、その内在的特性とその使用にたいして制約として働く文化的あるいは社会的背景のような**外在的特性**があると仮定する。そして、その仮定の下で、「嘘をつく」ことを「悪いこと」とみなす観点は、その外在的特性であることを、調整理論で補強された言語行為論の枠組みの中で種々の事例を用いて論証する⁸⁾。

因みに、言語行為論⁹⁾では、「嘘」は、**話し手自身が真でないと感じていることを聞き手に真であると信じさせようという狙いで遂行される言明型の発語内行為**であると定義される¹⁰⁾。この定義は、先に見た、『類語例解辞典』の定義とおおむね合致する。

従って、話し手は、「嘘」の発話においては、**自身の信念に抵触する言明**を遂行することになる。それゆえに、「嘘」の発話は、**言明の誠実条件に違反する行為**を遂行していると見なされる¹¹⁾。また、「嘘」は偽の言明であるから、現実世界のありさまを事実通りに描写していない。従って、「嘘」においては、その字義的発話に用いられている言葉は、それが描写するはずの発話時の世界

8) 調整理論の詳細については、Kubo (2003, 2004), 久保 (2010, 2011, 2012a, 2012b), Kubo and Suzuki (2007) を参照されたい。

9) Searle (1969, 1979), Searle and Vanderveken (1985), Vanderveken (1990, 1994) を参照されたい。

10) このような定義のもとでは、「嘘」は、命題の真偽のみに関わり、モダリティの関与する余地はないことになる。

11) 「嘘」をつくという発語内行為が、言明の一種である観点では、その遂行において自身が偽であると信じていることを、恰も真であるかのごとく発話するわけであるから、誠実条件に違反することになるが、その行為の遂行に際して、「嘘」をつくことにより、聞き手に、偽の発話内容を信じさせようとする意図〔発語媒介的意図〕にたいしては誠実である。

と合致しないから、**充足条件は満たされない**。しかし、「嘘」という行為は、聞き手が、その発話を嘘であると見抜けない限り、その発語内行為は首尾よく遂行されることになる。その意味で、「嘘」はまた、**首尾はよいが、誠実条件を満たさない欠陥のある発語内行為**と見なされる。

2. 悪いこととみなされていない嘘

2.1. はじめに

本節では、**悪いこととみなされていない**「嘘」の事例を観察することを通して、「嘘」の本質条件が何であるかを考察する。

2.2. 「出まかせを言う」

「出まかせを言う」とは、「場当たりので根拠のないこと、真偽が確かでないことを口に出すこと」であり、一種の**その場しのぎ**の調整行為である。

次の発話では、岡っ引きの左平次が、仕事の一休みに入った湯屋で、若者三人組が話題にしている女の特徴が、自分が捜している女のそれに似ていることに気づき、3人のうち話題の女とつきあっていたらしい優男の素性を知ろうと、手替屋（湯屋で濡れ手拭いを新しい手拭いに替える商売）の老爺に話しかけている。老爺から、優男の素性を聞いた左平次は、**その場を取り繕う**ために、下線部の発話を遂行している。この発話は、あたかも、左平次のこれまでの経験を真実めかして述べられているが、その場しのぎの口から出まかせの発話で、話し手である左平次が**その命題内容を真であると信じて**の発話ではない。彼は、「自身の正体を詮索されたくないという気持ち」から「知り合いであるように思い込ませよう」[発語媒介的意図]という狙いで口から出まかせを言っている。しかし、相手に対する悪気や悪意があつての発話ではない。従って、「嘘をつくこと」が、悪いこととみなされていない。それは、あくまでも自己保全のための「出まかせ」にすぎない。

- (1) 「昼間っから若い奴らの色恋の話聞かされると、耳に毒だぜ」

新しい手拭いの代金を老爺に渡ししながら、左平次は笑って、

「ところで、あの色白の若い衆は、どこかで見たようだが」

「それなら、三河屋の秀次さんですよ。若旦那の」

「呉服問屋の三河屋かい。そうだ、そうだ。この前の花見の時に、ちよいと紹介されたんだった」

適当な相づちを打ってから、左平次は湯屋の外へ出た。

(鳴海 丈『ものぐさ右近酔夢剣』)(下線引用者)

2.3. 「鎌を掛ける」

『大辞泉』には、「鎌を掛ける」とは「相手に本当のことを白状させるために、それとなく言葉巧みに問いかける。「一・けて本心を聞き出す」とある。

次例では、備前守が、下線部の発話を用いて佐嶋から平蔵の居所を聞き出そうとしている。この場合の言語行為は、「鎌を掛ける」という複合的発語内行為に当たるが、佐嶋自身が後で漏らしているようにその行為の中に「嘘」が混入されている。そして、この場合も、佐嶋の「嘘」には悪意はない。従って、ここでも、「嘘をつくこと」が、悪いこととみなされていない。

- (2) 「そのほうは、まったく、平蔵の居所を知らぬのか？」

「はい」

またしても、備前守は苦笑を洩らし、

「これ佐島。平蔵は、この手紙に、そのほうのみとは気脈を通じ合っていると、かようにしたためてまいったぞ」

「ま、まさかに……？」

「よい、よい」

京極備前守は破顔して、

「嘘じゃ。安心いたせ。そのほうに打ち明けぬまま、わしに秘密を告げる

ような長谷川平蔵ではないわ」

「お、恐れ入りましてござります」

「なれど……」

いいさして、備前守の顔色が引きしまり、
「まことを申せば、いまの平蔵は苦境じゃ、幕府においては盗賊改方が、
どのようにはたらくものか存じおらぬ人びとが多い。わしも、でき得るか
ぎりのことをしておるが…… いや何、わしは、一日も早く、この事件が
首尾よく終えることを願っている。そのように平蔵へつたえてもらいたい」
「ははっ」

京極備前守は、何も彼もわきまえているようにおもわれる。

(池波正太郎『鬼平犯科帳 22 特別長編 迷路』)

2.4. 複合的発語内行為

下線部の笹崎の発話は、一太郎からの「怪我の有無の尋ね」にたいして「ない」と自身が無事であることを答えた後、その「理由付け」をしたものである。

(3) 「笹崎様、ご無事でございますか。お怪我は」

「ないない。それがしには坂崎磐音以上の強い味方が付いておられるでな」

と満足そうに笹崎が言い、一郎太が、

「あれ、品川さんがご一緒でしたか」

と柳次郎と笹崎が同席する姿に首を傾げた。

(佐伯泰英『居眠り磐音江戸双紙 万両ノ雪』)(下線引用者)

この「理由付け」の発話において、笹崎は、品川柳次郎のことを「坂崎磐音以上に強い味方」と評している。しかし、坂崎磐音は江戸一番の剣の使い手であり、実際の剣の力量においては、品川は坂崎磐音には適わない。従って、そ

の意味では笹崎の発話は、現実世界における事実を述べたものではないし、彼の信念とも相容れない〔誠実条件違反〕。従って、ここでは、「嘘」の発語内行為が遂行されていることになる。しかし、この発話のコンテクストにおいては、笹崎にとって、その時、彼の身近にいて、暴漢から彼を守ってくれた品川の方が、旅先にいて助けを求めることの出来ない坂崎磐音よりも強い味方ということになる〔cf. 遠くの親戚より近くの隣人〕。従って、この笹崎の発話は、あくまでも、暴漢に襲われながらも柳次郎の助勢により事なきを得たことにたいする彼の本心から出た喜びと柳次郎への間接的な感謝と最大の賞賛のことばの表明であり、話し手の笹崎は、聞き手である一郎太にたいして何ら悪意を持たない。従って、この場合も「嘘をつくこと」が、悪いこととみなされていない。

因みに、この発話は、複合的言語行為であり、「説明」に加えて「喜び」と「感謝」と「賞賛」の3つの感情表現型の発語内効力を持つ。感情表現型の発語内行為は、言明型の発語内行為と違って、ことばと世界との間の合致は無い〔空の合致〕。これらの感情表現の発語内行為の誠実条件は、「発話時点の自身の心のあり方〔自身の無事を喜ぶ気持ち、柳次郎への感謝と賞賛の気持ち〕を裏切らない」ことであって、「自身が真であると信じていることを述べる」ことではない。その意味で、これらの行為の命題内容が、事実と抵触する大仰なものであったとしても、これらの行為の誠実条件を破るわけではない。

また、この「感謝と賞賛の表明」の発語内行為は、ことばから心への合致の方向を持つと共に、**気持ちの分かち合い（共感）**を求める調整行為である。ここでは、この調整行為は、**聞き手（一郎太）から話し手（笹崎）への調整**の方向を持つ。笹崎は、配下の同心一郎太にたいして、「自分の命が助かったのは、品川のおかげだ」ということを伝えることによって、それにたいする彼の感謝と賞賛の気持ちを一郎太にも分かち合ってもらいたいのである。

3. 「嘘」と解釈される発話の特性

3.1. はじめに

本節では、聞き手により「嘘」と解釈される発話で、かつ、「嘘をつく」と言う行為が必ずしも「悪いこと」とは捉えられていない事例を観察し、それらの発話に見られる特性を抽出する。聞き手により、ひとつの発話が「嘘」と解釈されるということは、その発話の時点において話し手の意図に反してその発話が「嘘」であることがばれたか、「嘘」でないにもかかわらず「嘘」と誤解された、あるいは、結果として「嘘」になる場合を意味する。

3.2. 「嘘」がばれた場合

発話の時点で「嘘」であることがばれることは、話し手にとって都合が悪い場合と、仕方がないという気持ちを引き起こす〔発語媒介効果〕それほど深刻でない場合がある。それは、発話の狙いとは独立した、発話の動機の重要度に関わる。話し手にとって純粋に自身の利益のための「嘘」〔自己利益誘導のための嘘〕がばれた場合は、その期待された利益が霧散する。一方、話し手自身の利益が2次的な場合、すなわち、聞き手の利益が話し手の喜びや満足の気持ちに直結するような場合は、「嘘」がばれたとしても、「ばれたか、しかたないな〜」で済む。このような場合、「嘘」がばれることがさほど問題とはならない。

次例では、船頭の嘘は、聞き手への「好意的嘘」〔利他的嘘〕であり、「嘘」が引き起こす不利益は聞き手にはない。従って、「嘘をつくこと」が、悪いこととみなされていない場合である。また、この場合、その嘘が「ばればれ」であっても、聞き手がその「好意的嘘」を「好意」として受け取っている以上、話し手・聞き手の双方に何の不都合も生じない。逆に、聞き手が、「嘘」を言う話し手の好意的気持ちを察し、その気持ちをありがたく受け止める場合、調整行為としての「嘘」は充足される。

(4) 船頭の良蔵が、

「おこんちゃんといいなさるか」

と声をかけた。

「はい」

「食べねえか」

と竹包みを差し出した。

「お得意様のおかみさんに貰ったもんだ。牡丹餅だ、食べねえ」

「船頭さんが貰ったものをいただいていいんですか」

「おりゃ、甘いもんが嫌いだ」

と良蔵は言ったが、おこんに遠慮させないための嘘とすぐに分かった。

「頂戴します」

竹皮を解くと牡丹餅が三つ並んでいた。

「船頭さん、三つもあります」

「ぜんぶ食べねえ」

「食べ切れません。船頭さんも一つ食べてください」

「そうか、そうだな。次におかみさんに会ったとき、どうだったと訊かれてもこまるもんな」

と言いながら良蔵がまず牡丹餅を摘まんだ。それを見たおこんも牡丹餅を口に入れた。

(佐伯泰英『「居眠り磐音江戸双紙」読本』)(下線は引用者)

良蔵は、牡丹餅が、本当は嫌いではないのに、おこんに遠慮させないためにわざと嘘をついている。「おりゃ、甘いもんが嫌いだから」の後には、「食べない。だから、遠慮しなくてもいい」とか「食べない。遠慮しないで食いな」が省略されているのであろう。この「嘘」は、言わば**善意の嘘**である。従来の、言語行為論では、このような嘘は、どう扱うのであろうか。間接的言語行為とみなすには、省略部分が明らかであるので、無理がある。従って、あくまでも

字義的発語内行為で、「AだからB。だからC」の形式を取る複合的発語内行為であろう。「嘘」そのものは、先の例と同様に、自分が真であると信じていないことを言うことになり、誠実条件に違反するとみなされ、首尾よく遂行されているが、欠陥のある発語内行為ということになる。また、真実を述べていないのであるから、命題内容は偽となり、充足条件も満たされないと判定される。しかし、このような説明の仕方は、この種の嘘の必要十分条件を示したことにはならない。

また、わざと嘘をつくことで何らかの発語内効果を生もうということでもない。つまり、**一般化された質の公準**の逆用でもない。一言で述べるとこの嘘は「相手の配慮に対する配慮」である。相手が自分への配慮で遠慮していることがわかっているときに、「遠慮するな」と言葉に出して、そのことに気づいていることを明らかにすることは必ずしも適切ではない。相手の配慮や遠慮はだまって有り難く受け止めることが、また、相手に対する配慮である。この嘘は、「遠慮せずに食べて欲しい」という気持ちを言葉にせず、相手にその気持ちを受け止めて貰うことを狙った調整行為である。そして、その狙いは「頂戴します」といっておこんが牡丹餅を口に入れた時点で充足されている。

3.3. 「嘘」と誤解された場合

次例の下線部の発話は、とても起こると信じられない事態の発生を告げられた聞き手が、狼狽して話し手にたいして聞き返している場合である。この場合の冬川の「聞き返し」は、相手からの情報を得るための「情報獲得行為」であると同時に、驚きのあまりに口から飛び出す自己調整行為でもある。従って、冬川にとっての関心事は、相手が「嘘をつくこと」が、悪いことかどうかの以前のことがらである。

一方、鯀沢の行為は、あくまでも、事実をそのまま伝えようとしたにすぎず「嘘」ではない。従って、鯀沢にとっても、この場合の関心事は、「嘘をつくこと」が、悪いことかどうかの以前のことがらである。

(5) 「どうかしたんですか」

鰻沢が振り返ったが、その動作は何かひどいショックを受けたあとのように緩慢で、眼鏡もずれ落ちたままだ。

「奈良井さんが、ベッドの中で亡くなっているんです」

彼は冬川の顔を見てくり返した。

「ほんとですか？」

「ほんとも何も……下へ来ればわかりますよ」

(夏樹静子『そして誰かいなかった』)(下線は引用者)

同様に、次例は、下線部1の発話の話し手である安藤玄丹が、お松と盗賊猫間の重兵衛の緊密な間柄を考えると、お松が重兵衛の計画を知らないはずがないと考えている場合である。そのような彼の信念にそぐわない返答をお松が返したので、玄丹は、その返答を「嘘」と見なしているのである。この場合、玄丹は、「嘘」をつかれることが、お松の悪意からなされるとは捉えていない。あくまでも、そうであったら、**水臭い**と考えているに過ぎない。従って、この場合も、「嘘をつくこと」が悪いことかどうかの観点は介在しない。

因みに、お松の下線部2の発話において、お松が本心を伝えているかどうかは定かではない。玄丹は、重兵衛にとって欠くことの出来ない手駒であるから、仮に、お松が「嘘」をついているとしても、それはあくまでも、彼女が、重兵衛から玄丹に押し込みの計画をまだ伝えないように命じられているからであり、悪意から事実を伝えないのではない。時期尚早であるから教えないのである。従って、この場合も、「嘘をつくこと」が悪いことかどうかの価値観は介在しない。

(6) 「おい、お松さん。猫間のお頭は、いつ、江戸へ来られるのだ？」

「間もなくでしょうよ」

「どうも、水くさいな。おれも、これほどに、はたらいしているのだ。いま

少し、腹を打ち割ってくれてもいいではないか」

「だからさあ、玄丹先生。こうして……ねえ、こうして、私が、こんなことを先生としているっていうのに……」

……中略……

「猫間のお父つあんの胸の内は、私にも、はっきりとはわからない」

「嘘をつきなさい、嘘を……」

「先生に、嘘をついても仕様がない」

(池波正太郎『鬼平犯科帳 22 特別長編 迷路』)(下線は引用者)

これらの観察は、人は「自身が真である(=間違いはない、あるいは、有りえる)と信じることがらや信じてきたことがらにそぐわない発話を他者の口から聞かされる」とその発話を「ありえないこと」、すなわち、「嘘」と解釈することを示唆している。しかし、これらの「嘘」の場合も、「嘘をつくこと」が、悪いこととみなされていない。

3.4. 結果として「嘘」になる場合：方便

話し手は、自身が信じていることをそのまま口に出すと相手の心や気持ちを傷つけることになると考えられる場合、自身が信じていることをそのまま口に出さない。つまり、結果的に、話し手は「嘘」をつくことになる。一般に、このような行為は「嘘も方便」という呼び方で受容されている。この種の行為は、言語行為者が、「人の心を傷つけることを言うな」という配慮の公準を、「嘘」をつくという行為に暗黙裏に適用しているものと考えられる。従って、当然のことながら、この種の「嘘」にも悪意は含まれていないし、「嘘をつくこと」が、悪いこととみなされていない。

(7) 「ねえ、あたしのおっかさんと、今のおっかさんと、どっちがきれい？」

おみやが尋ねると、店の者たちは、ちょっと考えるように間をおいてか

ら、

「先のお内儀さんもそりゃあお綺麗でした。比べることなんぞできませんよ」

と答える。だが、かれらが一様に「ちょっと考える」ということに、おみよは真実をみていた。大人は、何かははっきりと言にくいことがあると、それを見えない綿にくるんでから口に出すために、ちょっと考えるのだ。

「あたしは今のおっかさんみたいにきれいになれるかしら」

そう尋ねると、今度はみな飛びつくようにして、

「そりゃあもう、お嬢さんもたいへんな器量良しになりますよ」と答える。

その返答の素早さに、おみよはまた別の真実を見る。

大人は、子供の心を傷めないように言いくるめようとするときほど、考えなしでしゃべっているんじゃないかと思うくらい素早く答えてくれるものだ。

(宮部みゆき『本所深川ふしぎ草紙』)

この場合、下線部の発話は、おみよからの問いに即答できなかった店の者が、配慮の公準を遵守して、嘘をつくことでその場をとりつくろっている〔対人調整行為〕。そこでは、まず、不意に「正直に答えにくい（あるいは、答えの用意のなかった）質問をされた」という現実のもとで、「こころを乱され（あるいは、戸惑い）〔不均衡な心的状態〕」、「何とか答えなくてはと思い〔義務〕」、「当たり障りのない答えを探し〔調整〕」それを口に出している。

4. 「嘘」が「嘘」にならない条件

4.1. 「嘘」と「みなし」という対人調整行為

次の事例では、まず、はじめに、下線部1の東の発話がこの会話の主題を定める。つまり、この発話は、「せっかく最高の酒の肴があるのに酒がない」と

いう事態に直面して「残念だ」という心的不均衡な状態〔残念な気持ち〕と、それに伴う「酒があれば言うことない」という、酒が在ることによって充足される心的均衡状態を願う心的状態〔願望〕に東があり、その均衡化には酒が出されるという事態が発話以降において出現する必要があるという**会話の道筋**をつけている。そして、その道筋にそった事態の出現を可能にする言動が遂行されて初めて、その会話は充足されることになる。つまり、この場合のモダリティは、「**残念な気持ちを払拭したい願望**」ということになる。

ただし、この発話は、あくまでも「**眩き**」であり自己調整行為である。従って、他者にたいしての意図的働きかけではないし、対人調整行為でもない。言い換えれば、彼は、この発話によりおこんに酒を無心しているのではない。それにたいして、東の好みを周知しているおくんは東の眩きを聞くまでもなく彼の気持ちを察知して彼の望みを叶えてやっている。言い換えると、おこんの行動は、彼の眩きを見越したものであり、その意味で「**おもいやり**」の対人調整行為である。さらに、おくんは、自分一人が酒を飲んで良いのだろうかと多少後ろめたい気持ちでいる東の「**気兼ね**」たいして、下線部3で、酒ではなく水であると言うことで、**東の心の負担を軽減してやる〔対人調整行為〕**のである。ここには、東の「気兼ね」に対するおこんの「おもいやり」という相互の対人調整行為を見て取れる。これら一連の対人調整行為は、下線部1の発話によってつけられた会話の道筋に、合致するものであり、会話を充足させる。

(8) 握り飯に海鮮汁、それに蛸のぶつ切りと贅沢な昼餉だった。

「これで酒があれば申し分ないがな」

と酒好きな源之丞が残念そうに眩く。

「東様」

と気を利かせたおくんが茶碗酒を運んできた。

「おくんさん、それがしだけか」

「水にございますれば」

「おお、そうだ。これは水じゃあ」

と相好を崩した。

(佐伯泰英『居眠り磐音江戸双紙 野分ノ灘』)(下線は引用者)

因みに、下線部3と下線部4の発話対では、東とおこんは「酒」を「水」と見なすことを互いに了解し合って会話を進めている。作品の読者も含めて第3者は彼らの世界に属してはいない。言わば、後者は現実世界に属している。現実世界では「茶碗酒」を「水」と称するのは嘘になる。その意味では、下線部3のおこんの「言明」の発語内行為は、その行為の誠実要件に違反し、首尾よいが、欠陥のある発語内行為ということになる。しかも、言明行為としての嘘は、事実を正しく描写していないのであるから、それを求める「言明」の充足条件を満たさないことになる。しかし、「東とおこんのみなしの世界」では、現実世界の「酒」は「水」として成り立っている。従って、その世界では、下線部3の発話は「言明」の発語内行為の充足条件を満たしていると言ってよい。「方便」は現実世界から見れば「嘘」の一種に違いないが、それが認められた「みなしの世界」,「方便の世界」では嘘にはならないのである。

「みなしの世界」における発語内行為の充足は、「言明」の発語内行為そのものに内在する諸特性に依存するものではなく、その発話対を構成する発話の対象に対する会話参与者からの働きかけ、すなわち、その対象をどのように表現するかによって決定される。従って、この種の充足は、会話参与者が関与する発話対の外在的特性に依存していることになる。

尚、「方便」の「嘘」にも、話者の悪意はない。この種の「嘘」でも「嘘をつくこと」が、悪いこととみなされていない。

4.2. 「世辞」が「世辞」にならない条件

「嘘」と同様に「世辞」も、「話し手自身が真でないと信じていることを聞き手に真であると信じさせよう」という狙いで遂行される言明型の発語内行為の

ひとつである。ただし、「世辞」はこの定義に加えて、この発語内行為によって「聞き手を喜ばせよう」という**発語媒介効果を狙った意図的な発語媒介行為**が遂行される。言い換えると、「世辞」は「嘘」と違って、このような意図的な発語媒介行為の遂行が、その内在的特性を構成している。尚、当然ながら、「世辞」には悪意は含まれていないし、「嘘をつくこと」が、悪いこととみなされていない。

例えば、次の下線部の「そいつは若いな」という発話は、聞き手である元造によって「お世辞」と解釈されている。それは、その発話の遂行に際しての話し手の意図に関わらず、元造が、その発話に「喜んだ」からである。元造は自身の古希（70歳）という年齢を知っており、高齢者であると自覚している。従って、「若い」という評価とは、字義的には矛盾する。従って、そのような発話の遂行に関して、元造は、客が「元造を喜ばせるために、自身が真でないと信じていることを、あたかも真であると信じているかのように、元造に信じさせようとしている」と解釈することになる。そのような元造の解釈にたいして、七十郎は「お世辞ではなく本心だ」、つまり、元造の解釈は、誤解であると主張している。

ところで、「若い」という形容詞は、主観的評価を下すのに用いられる段階的形容詞である。この種の形容詞は、その語が示す評価を下す基準が必要となる。つまり、この事例の場合は、元造が何を基準にして、あるいは、誰と比べて若いとみなされるかが示されない限り、「若いな」という発話の真偽は定まらない。従って、元造の誤解が成り立つためには、「七十郎の知っている刀鍛冶が古希どころか喜寿（77歳）や傘寿（80歳）である」というような評価の基準となる**特別な会話の背景**が想定されなければならないであろう。そのような場合は、彼らに比べて元造は「若い」ことになる。従って、七十郎の発話は、所与の会話の背景に照らして事実を述べていることになり、「嘘」でも「世辞」でもなくなる。

- (9) 「仕込み杖について話をききたいとのことでしたが、よく手前のような年寄りのところへおいでくださいましたな」

「変わり種の仕込み杖をつくっているときいたものでな」

「はい、いろいろとつくっておりますよ」

七十郎は元造を見つめた。

「元造さんはいくつだ」

「もう古希はすぎました」

「そいつは若いな」

元造がにっこりする。口元のしわが穴を掘ったように深まる。

「お世辞でもうれしいですよ」

「お世辞じゃないさ」

(鈴木英治『女剣士』) (下線引用者)

5. 英語の嘘

5.1. はじめに

英語では、*lie* に *black* と *white* という修飾語をつけて、「悪意の嘘 (a black lie)」と「善意の嘘 (a white lie)」という表現を用いる。このことは、*lie* そのものには、「悪意」あるいは「善意」の意味が内包されていないことを示唆する。

ところで、‘Be sure it’s true when you say, “I love you.” It’s a sin to tell a lie (「君を愛してるよ」というときは、本気でなくてはだめよ。嘘をつくことは罪よ) (訳出は引用者)’ で始まる、*It’s a Sin to Tell a Lie* という 1930 年代に作られ戦後はやった歌がある。欧米のキリスト教文化圏では、「嘘」をつくことは、神の意志に反する行為、すなわち「罪」と見なされている。しかし、以下の項でも見るように、このような観点は、必ずしも実際の会話では、善悪の概念の

場合と同様、「嘘をつく」という行為に内包されない。このことは、この「罪」という概念も‘lie’に付加された内在的意味ではなく、文化的価値観により駆動される外在的意味と考えられる。

5.2. ありえない嘘

次例の下線部のように、明らか成り立たないことを、まことしやかに言い立てる場合、話し手は、字義的には**ありえない嘘**を遂行していることになる。

下線部の発話のうち「嘘ばかり言って」は、字義的には「ベンが発話をする場合、その発話は常に嘘である」を意味する言明の発語内行為である。そして、彼女は、同時に、間接的に「ベンの言っていることは正しくない」と不満を訴えている。一方、母親のジャッキーは、‘I NEVER do that, you ALWAYS lie!’というアナベルの発話にたいして、あくまでも発話を字義的に受け止めて、ありえない事態の描写を構成する‘Never’〔**全否定**〕や‘always’〔**全肯定**〕の台詞を用いないように娘を窘めている。つまり、彼女は、他者に対する言葉遣いを娘に教えているのである。しかし、この会話では、ジャッキーは、子どもたちに、‘It’s not fair to say ‘always’’とは言っているが、‘It’s a sin to tell a lie’とは言っていないし、それを暗示する台詞も用いていない。このことは、「嘘をつく」が「罪」であるか否かが、その内在的特性でないことを示唆している。

(10) BEN : Annabelle sucked her thumb last night.

ANNABELLE : I NEVER do that, you ALWAYS lie!

And SLUGS him.

JACKIE : Never say ‘never’ — it’s not fair to say ‘always’ — and no name calling. Use your words.

(R. Bass and G. Levangie, *Stepmom*) (underline mine)

ちなみに、「アナベルが指しゃぶりを絶対にしない」ということも、「ベンは口を開くと常に嘘を言っている」ということも経験的にありえないことであるから、事実と反し嘘になる。しかも、このような全否定・全肯定の台詞は、子ども口げんかではありえない嘘の**決まり文句**である。つまり、「嘘」としては、その成功条件も充足条件も満たされない発話である。この場合の全否定・全肯定の台詞は、共に話し手が自身の面子〔利害〕を守るための**自己保全行為**であり、そのうち、全否定の台詞は、相手の発話内容の誤りを全否定するのに用いられている。一方、全肯定の台詞は、相手の非を攻撃することで間接的に自身の正当性を主張する行為である。

5.3. たわいのない嘘

次例は、**たわいのない嘘**の例であるが、本音を相手に読まれてしまっている。欧米では、手料理を振る舞われたら、よほどひどい場合は別として、通例褒めて感謝の気持ちを表すのがマナーである¹²⁾。そのような会話の背景で、合衆国大統領アンドリュー・シェパード (SHEPHERD) が、親しくつきあっているシドニー (SYDNEY) の手料理を食したあと、マナーに沿って「おいしかったよ。有難う。」と言った。そこで別の話題に入れば良かったのだが、ルーチンの謝辞〔**コンテキスト駆動の調整行為**〕に加えて、「まだ、残っているかい」と期待じみた褒め言葉を挟み、あたかも彼女の料理が気に入ったかのように振る舞ってしまった。これは、言わば、調整行為から**情報獲得行為**への移行を意味する。しかし、食事中や彼がその台詞を言うときの彼の表情から、彼の心の内を見破った彼女は、彼の台詞にたいして、「山ほどあるわ。でも、あなたが気に入ってくださったと思ってないわよ」〔**情報提供行為**〕と彼の褒め言葉を受け付けない。その言葉にうろたえたアンドリューは、自身のうろたえを取り繕っている。以降は、「僕は気に入った」「いえ、貴方は気に入らなかった」、「貴

12) D. M. 鈴木 (2010) を参照されたい。

方は嘘をついている」「いや、僕は嘘をついてない」「いえ、ついているわ」と自身の見方の正当性を主張し合うやり取りが続く。

ところで、これらの発話に、‘It’s a sin to tell a lie’ という言葉、あるいは、それを暗示する言い回しが用いられているであろうか。いや、どこにも見あたらない。このことは、この種の会話においても「嘘をつく」ことが「罪」であるか否かが、その内在的特性でないことを示唆している。

(11) INT. SYDNEY’S APARTMENT-NIGHT

SHEPHERD and SYDNEY are finishing up dinner.

SHEPHERD : This was delicious. Thank you. Is there any left ?

SYDNEY : (*taking his bowl*) Tons. I didn’t think you liked it.

SHEPHERD : Are you kidding me, of course I did. But actually it’s not for me. The agent who checked the food thought it was delicious, and I sort of told him I’d bring him some if there was any left.

SYDNEY : So you didn’t like it.

SHEPHERD : No, I loved it.

SYDNEY : You’re lying.

SHEPHERD : No, I’m not.¹³⁾

SYDNEY : You are. I can tell when you’re holding something back. You do a thing with your face.

(Aaron Sorkin, *The American President*) (下線は引用者)

因みに、ここでの彼らのやり取りの形式は、**相互反駁**に相当する。従って、これらの行為は、その調整の方向はどちらからの歩み寄りもない**空の調整の方向を持つ調整不全の行為**ということになる。しかし、彼らは口論でも痴話げん

13) No, I’m not lying. 「いや、僕は嘘をついてない」と嘘をついている。

かをしているのでもない。シェパードの発話の狙いは、「シドニーの料理がまずい」という本音を隠すために、 unnecessary ことを口に出してしまったのである。言わば、会話を繋ぐ・場を持たせるための発話であり、コンテクストに駆動された調整行為であった。尚、下線部の調整行為は、相手との間の対人調整に加えて、自身の気持ちの調整〔自己調整行為〕も併せて遂行されている。この場合のシェパードの嘘は、言わば取り繕いであり、彼の発話内行為は、話し手から聞き手への調整の方向を持つ。一方、シドニーは、シェパードが彼女の料理を気に入らなかったことに気づいていたので、シェパードの余計な作り話を止めさせようとしているのである。従って、聞き手から話し手への調整の方向を持つ調整行為を随伴する。

6. まとめと今後の展望

本稿では、「嘘をつく」という行為の内在的特性は、あくまでも、「話し手自身が真でないと感じていることを聞き手に真であると信じさせようすること」であり、「嘘をつく」という行為は悪いことである」という日本文化における価値観や、「嘘をつく」ことは罪である」というキリスト教文化圏の価値観は「嘘をつく」という行為にたいして、文化的・社会的背景が付与した社会的規範であり、「嘘をつく」という行為の持つ内在的特性ではないということをさまざまな事例を通して論証した。

ところで、次例が示すように、「何事にも正直であることが善である」といった価値観〔外在的特性〕のもとでは、「嘘をつくことが憚られ、 unnecessary 「真の言明」が遂行されることで、適切な間主体（対人）コミュニケーションが遂行されなくなる。

- (12) 何もかも正直に告げて詫びることが出来たら、どんなに楽だろうかと思う。だがそれだけはしてはならぬと、幻斎は教えているのだ。正直という

のは告白する人間の自己欺瞞であり虚飾である。本音をいえば、それは正しく自分が、楽になることなのである。自分だけが楽になって、辛いことはすべて相手にあずけてしまうことなのである。そのために相手がどれだけ苦しみ、どれだけ辛い思いをしようと、そんなことは知ったことではない。自分は正直に告白しただけである……。この場合の正直という言葉は、絶対に美德ではない。相手の心を傷つけて平然としていられる浅薄さであり、破廉恥さであり、残酷さである。

(隆慶一郎『かくれさと苦界行』)(下線は引用者)

この事例は、話し手は自信の知りうる・知っている情報を偽りなく他者に伝える、すなわち、情報伝達を主たる目的とする発語内行為のみから「嘘」という言語行為は捉えきれないことを示唆している。人と人とのコミュニケーションにおいては、知的情報伝達に加えて対人関係の円滑化に必要とされる相互の調整行為が遂行されている。

本稿では、主として、「嘘」の言語行為は、情報の真偽といったその行為の内在的特性にかかわる部分と、善悪や罪といった社会的文化的価値観といったその行為の外在的特性にその考察をしまり、お互いの立場を配慮する調整行為・配慮行動の観点からの考察は部分的なものに留めている。今後は、これらの観点を加えた「嘘」についてのより包括的・体系的な分析を進めたい。

参 照 文 献

- Kubo, S. 2003. "Directions of Regulation in Speech Act Theory." In Turner, K. and Jaszczoolt, K. M. (eds.) *Meaning Through Language Contrast: Cambridge Papers*. 183-195. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Kubo, S. 2004. "An Invitation to Regulation-augmented Speech Act Theory." In *Pragmatics in Second Language Acquisition: A Focus on Speech Acts*, 21-38. JACET.
- Kubo, S. and M. Suzuki. 2007. *Politeness and Regulation*. Koyo Shobo.
- 久保 進. 2010. 「人はなぜ交感的言語使用を必要とするか」, 岸本秀樹 (編)『ことばの対照』, 245-256, 東京:くろしお出版.

- 久保 進. 2011. 「第21章 言語行為と発語内行為」, 澤田治美・高見健一(編)『ことばの意味と使用: 日英語のダイナミズム』, 234-245, 東京: 鳳書房.
- 久保 進. 2012. 「言語行為と発話のコンテキスト」, 澤田治美(編)『ひつじ意味論講座 第6巻 発話とコンテキスト』(ページ未定) 東京: ひつじ書房.
- 松村 明(監修). 1998. 『大辞泉 増補・新装版』東京: 小学館.
- Seale, J. R. 1969. *Speech Acts—An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Camblidge University Press. (坂本百大編. 1986. 『言語行為』東京: 勁草書房.)
- Seale, J. R. 1979. *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Act!* Cambridge: Camblidge University Press. (山田友幸監訳. 2006. 『表現と意味』東京: 誠信書房.)
- 小学館辞書編集部(編). 2003. 『使い方の分かる類語例解辞典』東京: 小学館.
- Vanderveken, D. 1990. *Meaning and Speech Acts vol. 1*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Vanderveken, D. 1994a. *Principles of Speech Act Theory [Cahiers d'Épistémologie, 9402]*. Montréal: Université du Québec à Montréal. (久保 進訳注. 1995. 『発話行為理論の原理』東京: 松柏社.)

引用資料

- Bass, R. and G. Levangie. 1998. *Stepmom*. Columbia Pictures.
- 池波正太郎. 1992. 『鬼平犯科帳 22 特別長編 迷路』東京: 文藝春秋社.
- 宮部みゆき. 1991. 『本所深川ふしぎ草紙』東京: 新潮社.
- 鳴海 丈. 2002. 『ものぐさ右近酔夢剣』東京: 光文社.
- 西村京太郎. 1994. 『松島・蔵王殺人事件』東京: 徳間書店.
- 隆慶一郎. 1987. 『かくれさと苦界行』東京: 新潮社.
- 佐伯泰英. 2008. 『「居眠り磐音江戸双紙」読本』東京: 双葉社.
- 佐伯泰英. 2007. 『居眠り磐音江戸双紙 野分ノ灘』東京: 双葉社.
- 佐伯泰英. 2007. 『居眠り磐音江戸双紙 万両ノ雪』東京: 双葉社.
- Sorkin, A. 1995. *The American President*. Universal Studios.
- 鈴木英治. 2009. 『女剣士』東京: 角川春樹事務所.

インターネットホームページ

'It's a Sin to Tell a Lie,' *Wikipedia, the free encyclopedia*

http://en.wikipedia.org/wiki/It's_a_Sin_to_Tell_a_Lie.

鈴木 D. 美智子. 2010. 「米国上流式 子どものマナーと躰け (4)」『素足とトーク』<http://triple-michiko.blogspot.com/>